

## 古歌を訪ねてその九

「更級日記」より

「月の光と悲しみと」

丹下 重明

浅みどり

花もひとつに霞みつづ

おぼろに見ゆる春の夜の月

菅原孝標女

新古今和歌集・春歌上(56)

詠者の父、菅原孝標は菅原道真から四代後の人です。その娘菅原孝標女(1008~1060)ころ? 以下孝標女・当時の常として、名前は不詳)は平安日記文学の一つ「更級日記」の作者でもあります。

よく知られるとおり、菅原氏は代々学者の家柄で、大学頭や文章博士などを多く輩出しています。

孝標女の母方の祖父は歌人の藤原倫寧、同じく母方の伯母には「蜻蛉日記」の作者藤原道綱母などがあります。彼女はそうした人たちの血を受け継いでいたのかと思われる。ただ、父、孝標はいわゆる大國ではありませんが一介の受領で

終っています。

◇ ◇ ◇

冒頭の一首は「更級日記」後半にある歌でもあります。日記によれば30才を超えてから、孝標女が祐子内親王(後朱雀天皇第三皇女)に女房として仕えていたころ、邸内で、もう一人の女房と、当時上流貴族の貴公子だった源資通との三人で、春秋の優劣を語り合っていたときの歌と書かれています。ただし、「新古今和歌集」(以下新古今集)のこの歌の詞書とは少し異なるのですが。

大意は、春秋どちらにころひかれるかと申しますと、という前提をふまえ、「私は、浅みどり色の空も、桜の花も、霞のようにおぼろにひとつに見える、春の夜の月がとてもいいと思うので、春をとります。」と言って、春の夜の月の幻想的な美しさをたたえています。

◇ ◇ ◇

「更級日記」は孝標女がその晩年、生涯を顧みて、書きしるした日記です。内容は一見平凡で地味な日常生活中心の記事なのですが、作者の独特な鋭い感受性と豊かな美的感覚があつてところを動かさ

れます。

◇ ◇ ◇

過日、朝日新聞の「天声人語」欄にこんな一節がありました。「やつと口にする、消え入りそうな声だからこそ、相手に届く何かがある」と、「小さな声」の大切さを書いていました。「更級日記」の、ひかえめで地味な表現が、かえって人のこころに届く何かがあることと共通していると思うので

日記は彼女が13才の折、父が上總介の任期を終え、京へ戻る旅に同行するところから始まります。「あずまの道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひいでたる人」と自己卑下のような出だしがあつて、そんな田舎者の私がなぜか「物語」に夢中になり、特に「源氏物語」に強く魅かれていと書いています。そのころの孝標女は今日でい

えば、ロマンに憧れる文学少女と似たところだつたと思われま

◇ ◇ ◇

総じて感じられるのは、彼女は地味ですがやさしい性格だつたという事です。日記の前半部分、特に十代の終わりの記事からそれが読み取れます。旅の途中で病の乳母を見舞う場面や、京に戻つてからの尊敬する

継母とのころならずもの別れの文章などには彼女のこころのやさしさが表れています。

また、これもころから傾倒していた姉に先立たれ、まだ十代の若さで、遺された二人の幼児の面倒を見ることとなる話などにも同じように彼女のやさしさがにじみ出ています。

◇ ◇ ◇

「更級日記」のこうした辛く悲しい場面に印象的に描かれているのは、「月の光」です。

京への旅の当初、病に伏せる乳母を見舞う場面では、苦をふいただけの粗末な小屋のようなところ

に伏せていた乳母の顔を月の光が照らしていました。常よりも清らかで美しく見えた乳母は、孝標女を抱き寄せて涙します。

その乳母も京に帰つた後に、はやり病で亡くなるのですが、その記事にも前記の月の光の情景が回想されています。

この時代、乳母とは、今日想像する以上に強い絆でむすばれた間からで、実の母以上の存在だつたと考えられます。それだけに乳母とのこうした記事は、「月の光」を介して、印象的な文章となつて

いてころを動かされませぬ。

もう一つは敬愛する姉の死にまつわる話です。孝標女の姉は、上總に同行していた継母とともに、彼女に、「物語」を教えてくれた人たちでした。文学への興味を引きだしてくれたのです。

その姉は、孝標女が17才の時、亡くなります。二人の女の子を遺して。彼女は二人の幼児を左右に抱えて寝かせていると、その児の顔に板屋根の隙間からもれてきた月の光が差し込んでいました。不吉に思つて袖で覆つてやりながら、亡き姉のこと、ふたりの遺児のこと、に思いをはせるのです。

こうした悲しみにみちた、静謐で抒情的な情景の描写には、孝標女のやさしさと、すぐれた美的感覚が感じられます。月の光はそれを一層きわだたせてくれています。

◇ ◇ ◇

孝標女の歌人としての評価はそれほど高くはないのですが、それでも「更級日記」には88首もの歌が挿入され、内64首は彼女の作品です。もともとあつた彼女の家集が、「更級日記」の原典という説もあります。

冒頭の一首は、「新古今集」に唯

一取り上げられた歌です。ちなみに勅撰集入集はこの歌を含め15首です。

新古今集の春歌には、第5句を「春の夜の月」と結んだ歌が孝標女の一首を含め、四首もあります。たとえば、次ぎにあげる藤原定家の作品などは、情趣的には冒頭の孝標女の歌に似たところがあります。

大空は梅のほひに霞つつ

曇りもはてぬ春の夜の月

不思議なことに、同じ王朝和歌でも、400年さかのぼつた「古今和歌集」には同様の歌は一つもないのです。時代の相違といったことなのでしょう。

筆者が本誌76号の「古歌を訪ねて・その六」で取り上げた俊成卿女も、その晩年の歌に「春の夜の月」が詠われています。

ながむれば

わが身ひとつのあらぬ世に  
むかしに似たる春の夜の月

◇ ◇ ◇

冒頭の孝標女の一首は、彼女が

すでに夫も子供もいた30才を過ぎてからの作品です。春秋いづれをとるか、という古くからのテーマでの詠歌です。

ここでの「月」は、先に書いた十代のころの感傷的なそれとは異なる、やわらかい春のおぼろ月です。新古今調を先取りしたような歌です。

同席していた時の貴公子、源資通は孝標女が、生涯で初めてあわい恋心を抱いた男性でした。ひかえめで、思いを露わにすることの苦手だった彼女―それは、まさに春のおぼろ月のような恋だったのでしょうか……。

おわり

